

## 内戦と変容：タジキスタンのタタール人社会にみる民族的紐帯と母語継承から考える

櫻間瑞希 (中央学院大学・専任講師)

### 要旨

本報告は、かつて内戦（1992～1997）を経験したタジキスタンのタタール人社会における母語継承と、個々人の民族的なよりどころに関する語りを手がかりに、内戦がタジキスタンのタタール人社会に及ぼした影響を検討するものである。内戦が現在のタジキスタンに及ぼした影響に関しては、主に政治・経済の観点からの研究が多数なされてきた。その一方で、内戦がもたらした社会的不安定さが、歴史的に複雑な民族構成をなすタジキスタンにおいて、諸民族にどのような影響を及ぼしたかについては依然として検討の余地が残されている。本報告で事例として取り上げるタタール人は、内戦前後で最も人口が激減した民族集団のひとつでもある。

なお、本報告では、統計データから得られる人口構成や言語使用の変化に関する検討をふまえたうえで、質的調査を組み合わせた手法をとる。具体的には、内戦期の経験に関連する個々人の語りを通じて、ミクロな視点から内戦の影響と変容の過程を明らかにする。

戦中から戦後混乱期にかけて、当時国内に暮らしていたタタール人の多くは国外に移住した。ソ連期までタタール人の文化と紐帯は主に親族関係のなかで維持されていたことから、親族関係の断絶により、これらも同時に損なわれることになった。また、内戦後のタジキスタンではタジク人の人口比率がいっそう高まった。ゆえに、さまざまな理由からタジキスタンに残ったタタール人のあいだでは、ある種の生存戦略としてタジク語の習得が優先され、現在に至るまでかれらの大多数はタジク語とロシア語の 2 言語話者である。また、激しい内戦とその後の復興を経験したかれらにとって、タジキスタンはすでに自身から分ちがたい存在となり、タジキスタン国民であることを強く内面化している。このような背景から、一度は国外に移住して戻ってきたタタール人にとっても、国内に残ったタタール人にとっても、タタール語の継承は困難となった。

内戦以降は経済的困難が深刻化し、多くのタタール人がロシア・タタールスタン共和国への出稼ぎ労働を経験していた。一方で、タタールスタン共和国のタタール人社会にも、出稼ぎ先のタジク人社会にも馴染めず、そこで自身がタジキスタンで育ったこと、タジク人ではなくタタール人として生まれたことをはじめて強く意識するようになった、という語りも少なくなかった。似たバックグラウンドを持った個人同士が繋がり、民族的紐帯を強めた事例も見られた。このような繋がりには帰国後も SNS を通じて維持され、一部ではタタール語を学んだり、伝統行事に参加したりするといった具体的な行動にも結びついていった。出稼ぎ先での経験が、かれらを”タタール人にする”側面もあるといえるだろう。

タジキスタンで多数派を占めるタジク人とは違っているが、一方で、タタールスタン共和国のタタール人とも異なる経験をもつ——このような自己認識のもとで、かれらは自らをタジキスタンのタタール人だと位置付ける。現在のタジキスタンのタタール人社会は、内戦という特殊な出来事を経て、新たなアイデンティティと民族的紐帯を再構築しつつあるのではないだろうか。